

RCC FORUM

No. 29



最上敏樹（もがみ・としき）氏

1950年生。東京大学法学部卒業、同大学院法学政治学研究科博士課程修了（法学博士）。80年より国際基督教大学にて教鞭をとり、同・平和研究所所長、同ロータリー平和センター所長を歴任。この間米国、スウェーデンで在外研究。主著に「国連とアメリカ」（岩波新書・2005）、「人道的介入」（岩波新書・2001、2003年7月ソウル Sowha Publishing より韓国語版上梓）等、他共著および論文も多数。

テレビやラジオの解説番組への出演も多い。

※写真はNHK人間講座HPより転載

敵意の中垣を超えて

— 国連体制に欠けるもの —

国際基督教大学教授

最上 敏樹 氏

●日時: 2005年6月28日(火)

2時限 11:10~12:40

●会場: 関西学院大学

上ヶ原キャンパスB号館 101

—どなたでも聴講できます—

講演内容

冷戦が終わったとき、これで世界平和が訪れるという期待が高まった。しかし、その後の世界では戦争がなくなるどころか、むしろさまざまな種類の武力紛争が増え、事態は悪化しているように思われる。加えて、悪に立ち向かい、積極的に武力行使をすることが「平和」であるかのような風潮さえ広まりつつある。

いったいなぜこうなったのか。私たち人類は、「平和」の本質的要素をいまだに見失ったままなのではないか。一時的に勝つということではなく、長期的に和解することをめざすのが本質的なのだということに、まだ気づかぬままなのではないか。

その中で、第二次大戦後国際平和体制の中軸だったはずの国連も、中軸になり切れぬまま、次第に力を失いつつあるように見える。安保理常任理事国問題の混迷にも見られるように、何を構成原理とし、どういう目的のための機構とするかさえ、いかなお揺らぎ続けている。ここにおいて、何が見直されるべきなのか。

平和の一つの意味は、人間を合理的な理由なしに分け隔てる境界線がないことである。とりわけ、「敵意の中垣」と呼びならわされてきた、憎しみの境界線である。それをどう乗り超えていくかを、現代の平和の中心課題として共に考えたい。